

## 茶道における喫煙の受容

### はじめに

茶道において、喫煙の行為は2つの場所で考えられる。一つは招かれた客が待ち合う場所の「待合」と、もう一つは茶席での「薄茶」の席中の二か所である。

近年の世論は嫌煙の傾向が強いものの、現在の茶会では煙管や火入れなどの喫煙具が飾られる場合がほとんどである。そこで本研究は茶席における喫煙の歴史的な経緯と、その実際について研究するものである。

### 茶道における喫煙の周辺

先にも述べたように、茶席で用いられる喫煙具は一般には「煙草盆」という名で呼ばれる。これには煙管、火入れ、モグサを入れた煙草入れが仕組まれる。

通常、客が集う待合や、僅かな時間ながら茶席に入るまでに立ち寄る腰掛け等におかれる。また薄茶席には必ず出すということが通常化している。



煙草盆に火入れと煙管を入れたところ

### 歴史的経緯

桃山期～江戸時代初期

近世絵画資料から、「邸内遊楽図屏風」(徳川美術館所蔵)を挙げる。(下図)



この屏風は、寛永年間の風俗画として現在、徳川美術館に所蔵される。注目できる点は、台子飾りの茶具と共に喫煙が行われている点である。

式正な茶の湯の場ではないことは明らかであるが、喫茶と喫煙が同時空間で行われている点でも町衆における



「台子」に道具を配置したところ

性格を表しているものと考えられる。ここでの台子の配置をみると、点前をする棚物というより、むしろ、利便性から置かれた呈茶棚の性格が強いように思われ、茶を点てる茶頭らしき人物の姿も描かれている。

ほか資料としては「邸内遊楽図屏風」(フリーア美術館所蔵)、「邸内遊楽図屏風」(サントリ-美術館)、「遊興風俗画」(カウンティ美術館所蔵)がある。

これらの近世絵画資料の製作年代は桃山期から江戸時代初期にかけてである。つまり、これらの時代において台子の茶と喫煙が同時に行われていたと考えられる。

その背景には、利休をはじめとする侘び茶が器物を尊重するほうに重きがおかれた。一方で、喫茶としての茶が流行し、屏風にもある遊楽の場でも受容されるようになったと考えられる。

江戸時代初期から後期

千家茶道や将軍家以下大名家に仕える茶室の出現による流派の成立により、茶の点前が形成されていくようになる。

そこで、各流派における茶書から煙草に関する記述を見出すとき、その配置や煙草盆を

出す「間」について書かれるのみである。

ただ、この間、煙草盆に大きな変化を見ることが出来る。それは茶匠や茶人による好み物としての煙草盆の出現である。

所蔵品を売り立てるときの目録である「売立目録」でから、その好みとする煙草盆をいくつか見出すことができた。その特徴は木地で作られたものや塗り物などである。一部には尾形光琳の蒔絵の雰囲気伝える光琳調の煙草盆もみえる。

#### 明治期以降

財界人を中心とした茶の湯文化が形成される時期となる。この時代、売立が各地で行われ、各家に所蔵されていた器物が市中に流出することとなる。それらを収集し、茶席で用いたのが財界茶人といわれる人々である。その主な人物には益田鈍翁（三井物産）、藤原銀次郎（王子製紙）などがある。

これらの茶人のなかで煙草盆もその例が出はなく、茶席で用いられる器物に応酬する煙草盆が用いられるようになる。

その主なものは火入れである。

火入れは、朝鮮半島で焼かれた磁器として古染付、南京赤絵、日本国内で作られたものとしては唐津、織部、志野などの古陶が主要な位置を占めるも、これらに留まることはなく、各産地の焼き物も火入れとして用いられた。朝鮮半島で焼かれるものは日本からの注文品であるが、明らかに火入れを目的に注文したものである。特に古染付火入れの場合、内側に釉薬が掛ったものが火入れ用、掛っていないものが茶碗や向付用に作られたものである。

これらの火入れは現在でも光悦会や大師会など日本国内で開催される主要な茶会の客が寄りあう寄付きの場で見ることができる。

その背景にはこれらの茶人によって多く取り上げられたと考えられるが、一つには観賞陶器としての火入れの存在がある。

そのため、向付けが五客であったものの一つを火入れに転用する例もある。

#### 茶席での煙草とその実際

かつて茶会で招く側が客に煙草盆を出す場合、煙管の雁首を紙で巻いておき、その煙管で飲みまわすことがあった<sup>i</sup>といわれる。そこで、『古今雑談』<sup>ii</sup>にみると、先ず、茶席での煙管には「鼻紙を延べ煙管に鑿」したものを外すとある。また、吸い終わると鑿をつけ元に戻すという喫煙の礼式があることが述べられている。興味深いのは、煙草が流通した江戸時代においても煙管をもたない者は、煙草の葉を紙で巻いて喫することがあった。

つまり、煙草盆にモグサと煙管を付けて出すことは、当時において十分な饗応の形式であったことが指摘できる。

近代にいたっての茶席での喫煙は『茶道第一歩』<sup>iii</sup>に詳しく書かれている。

その中では「茶室にても喫煙は自由なるも点茶中は可成喫煙せぬがよい。若点茶中に喫煙せんとせば主人へ失礼の旨を述べなければならぬ」としており大正時代前後での茶席では、喫煙が一般的でなかったことが分かり、嗜好品の饗応としての位置づけがある。

#### 今後の課題

桃山以降近代にいたるまでの茶道と喫煙について調査し、近世絵画や工芸品、茶書から嗜好品を取り入れた茶の湯文化の一面を明らかにした。今後、茶の湯文化の周辺にある当時の風俗事情も含め、喫煙と茶の湯文化の周辺を明らかにしていきたい。

また、一方では実際の茶会における記述を茶会記や茶書から見いだせていない現状がある。今後、包括的な調査を進めていきたい。

<sup>i</sup> 『茶道雑誌』河原書店 堀内宗完による「抹茶六十条」の解説中にみえる。

<sup>ii</sup> 『古今雑談』堀誠之 明治 25 年 金港堂書籍会社

<sup>iii</sup> 『茶道第一歩 全』横山聴軒著 大正 14 年 長嘯庵発行